

協議会ニュース 72号

愛知県自然観察指導員連絡協議会 1999. 2



自然との共生について

「話題の地見学会」としては、おそらく最後になると思い、万博予定地である海上の森を取り上げました。

10月23日の当日、事務局が都合で出席できなくなり、参加者には申し訳ありませんでしたが、4人の参加者は予定どおり、吉田川から三角点を通り四ッ沢へのコースを歩きました。

万博の是非は、以前から問題となっていました。今回は、良いか悪いかではなく、ここで行われる万博が、果たしてテーマとなっている自然との共生という面でどうなのかを考えてみたいと思った計画でした。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

「万博予定地の見学」

青木雅夫

海上の森は、2年前に行ったきりだったので、今回の研修は楽しみにしておりました。当日は、東山の滝田氏、初めての氏原、鈴木(豊)両氏。全員しっかりしたリーダーに案内してもらえるものと考えていたのがっくり。それでも事務局の佐藤氏から沢山の資料を受け取り、なんとかスタート。

今日の予定コースは、南側の愛工大に近いAゾーン。

10:30 車止から吉田川ぞいに歩く。すぐ木立に囲まれる。川岸に直径20cmほどのアカメガシワを締めつけるフジに見入る。近くにはスズカアザミに吸蜜中のアサギマダラ。無風の中をもう1羽がひらりひらりと優雅に舞う。歩を進めると、ノコンギクが美しく咲き、ヤマシロギクも見つける。少し先

の明るく開けた所ではママコノシリヌグイの群落があった。植生の変化の多さには目を奪われる。

11:30 道の左手に小さな池を見つけ、地図で確かめ、ここから左折。5分ほど昇ると尾根筋に出る。すれ違う人もいない。

11:42 三角点へ出て、ここで小休止。周りの山並みを眺め、名古屋市内方向を遠望し、万博について話し合う。ここでの開催について良し悪しは出たが結論には至らない。

11:50 尾根筋を下り、沢にそって雑木林の中を歩く。しばらくして沢を渡り、ここの湿地で小休止。ヌマガヤにとまったマイコアカネをとり、早見表で確認。足元のミミカキグサとミズゴケの中にヒメタイコウチを見つけてしゃがみこむ。ここから北へ進む。男女5人のグループとすれ違う。途中測量中の作業員に道を聞いたり、地図で確認したりして道をたどる。どうも間違えたようだが、兎に角北へ進む。最後は、谷の堰を飛び下り、人影を見つけて四ッ沢に出る。

12:30 ここは今までと違って、車も通人も多く、まるで行楽地の雰囲気。前方の草の茂みでキジを観察。6羽。慣れているのか逃げ出す様子もなく、餌をついばんでいた。

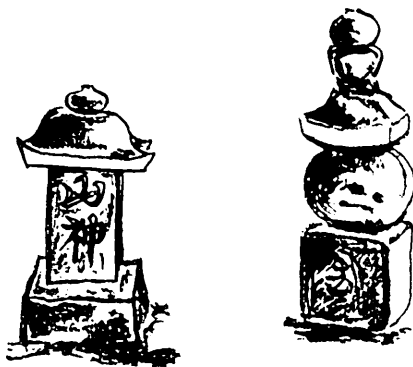
12:55 多度神社に到着。本殿の駒犬が陶製なのは、さすがにご当地と感心した。ここで昼食。境内にはツブラジイが何本もあり、鎮守の森の趣き。台風の影響か小枝や実が一面に落ちていた。ツブラジ



イをこんなにしっかり観察できたのは大収穫。

13:25 田んぼ道へ出る。ヤマハッカを確認。行き交う人も急にいなくなり、我々4人雑木林の道をたどる。途中来た道と重複し、さらに西方をめざす。

14:15 五輪塔に着く。地図で確かめずに、すぐ出発。



14:23 御嶽神社へ。途中アラカシの大振りなドングリを観察。村の家並を通りけ、少し回り道をして……

14:35 車止めに着く。

〈メモ〉 現地に詳しいリーダーに出席していただきました。そうすれば、もっと観察がしっかりできたものと全員の意見。

- ・地図（全体図）が不正確で、予定通り歩けなかった。特に三角点から四ツ沢までの距離は長く、1人なら不安になって引き返したと思う。
- ・よかったのは天気。晴れのち薄曇りで歩くには丁度いいコンディションだった。

※ ※ ※ ※ ※

「海上の森の自然観察会」

氏原 弘

海上の森のグリーン環境を大切にしたいと願います。市民や若い人も皆森を愛する心はだれでも同じだと思います。

新聞、マスコミ等でも取り上げられている

海上の森で、今回はA～Bゾーンを観察。三角点まで登り、周囲を見た場合は、自然の状態でよくわかります。その周囲などをよく見れば、樹木の成長等が止まり、自然環境も破壊されるとは思われぬ。

地元の長い歴史からみれば、自然との共生、地域と人間社会の生活の為の開発が一体となればよいと思います。

今回は、一部だけの観察でしたので、全体的に見れば、まだ検討の余地があると思われました。

※ ※ ※ ※ ※

「海上の森の自然観察会」

鈴木 豊

偶然、名古屋支部の「なんじゃもんじゃ通信」を目にして、暇だったのと、好天だったのと、海上の森だったのにひかれて、数年ぶりに自然観察会に参加しました。

講師の方が都合で出席できず、詳しい解説が聞けず残念でしたが、それでもベテランの指導員の方の説明を受けつつ森を歩きました。

「数十年前は禿げ山だった所。こんな森は愛知県にはいくらかもある」という話でした。それでも名古屋市内の講演や林と比べれば格段に多様な自然であること、それゆえに大都市近郊の森として、市民が自然と親しむ場所としては貴重であること、（この日もたくさんの方が散策していました。）万博をやる場所は探せば他にもありそうなこと、県財政が逼迫している折り莫大な予算を公共事業に支出することへの疑問など、海上の森での万博はどうしても賛成できないと思いました。

それにしても、他の指導員の方がタフなこと、私が最年少のようでしたが、ついて歩くのが大変で、後日に疲れが残りました。やはり日頃から歩いている人は強い。私も少し暇になったので、これからは少しは観察会等に参加したいと考えました。

「自然との共生について」

事務局

今回の国際博覧会は、自然との共生をメインテーマとしています。「地球上に、自然と人間がともに共生し続けていく豊かな社会を作り出すこと」が必要であり、自然と人間の関係に豊かな回復をもたらすためのモデルをつくるために万博を行いたいとしています。自然との共生とは耳にやさしい良い言葉ですが、果たしてそれがどういうものかという共通の認識はまだまだできていないように思えます。ここでは、「自然との共生とは何か」について、少し考えてみたいと思います。充分な検討によりまとめたものではないので、皆様のご意見をお待ちしています。

〔共生とは〕

自然界には、共生している生物はたくさんありますが、2種類の生物が相手の生活にプラスになるために共生しているのではなく、ある生物が自己の効率的な生活を求めているなかでたまたま他の生物が自己の役に立つ場合に共存を認めたものが一般と思われます。生態系は、微妙なバランスをもって成り立つシステムですが、個々の種がそのバランスを意識しているのではなく、生物間の生存競争のなかで結果としてもたらされたバランスであると思えます。それも、地球の45億年の歴史の中で築かれたもので、その間にはいろいろな試行錯誤があったことでしょう。

花は蜜を貯えて昆虫を呼びますが、どんな昆虫にも来て欲しいのではなく、昆虫は蜜を求めて花にやって来ますが、花粉を運ぶのはできれば止めたいはずです。櫛の木はたくさんどんぐりを落としますが、ネズミやカケスに食べてもらうために実を作るのではないでしょう。

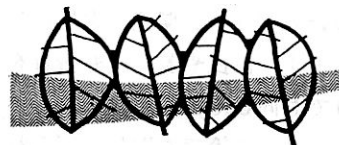
生物が全体としてどのような摂理に基づい

て生活し、進化しているかはわかりませんが、「共生」とか「生態系のシステム」は、多くの種の生存競争の結果としての現象と思えます。

人間にしても、自分たちの生活の場は快適にしたいものであり、蚊や蠅は家の中へ入らないようにし、庭には雑草の一本もないことを求めています。生活する町の中でも雑草が茂っているのは、景観的に良くないと思うのが普通でしょう。身近に小鳥やきれいな蝶が来るのが豊かな生活とはいっても、なめくじやドクガがいるのは好まないでしょう。農業の歴史は、害虫や雑草との戦いの歴史でもあります。都合のよい生物だけ身近に来るのを許すのでは、本来の共生とは言い難いと思われるます。

こうしてみると、生物にとっても、人間にとっても、基本的には「共生」はあり得ないこととも思われます。人と生物の生活の場を重ねて、その中で生存できるものは限られるでしょう。常陸風土記にあった、ある人が田を開墾しようとして、蛇であるヤトの神に邪魔され、鉾をとって戦った末に、ここからは神の土地、ここからは人の土地と境を設けたという話があるように、自然地と人の住む場所を分けてこそ、お互いの生存が守られると思われれます。「共生」とは、基本的にはそうしたものであるような気がしますが、どうでしょうか。

なお、日本的・地球的に見た場合には、人間と生物が共に生存していくことは非常に大切なことです。しかし、この場合も、今の立場は、人は強者であり他の生物は弱者です。強者が弱者に対する態度は、共生ではなく配慮であるはずですが、共生には強者の権利が含まれる一方、



配慮は強者が弱者のために、自己の犠牲もある程度必要であるとの態度があると思われます。

万博が自然との共生をテーマとするならば、ただ瀬戸における事例的な検討に留まるのではなく、「共生」とはどういうことか、これからの人と生物のあり方はどうなのかを、理念的に追求し、その指針を世界に示すのではなくてはならないでしょう。

〔貴重な生物の保護〕

現在の開発に伴う自然保護は、貴重な生物を対象としすぎるくらいです。確かに、人間のために、生物のある種が減んでいくことは好ましくないことであり、悲しいことです。しかし、貴重な生物の保護と言っても実際に行うのは非常に難しいことと思います。そのためには、何が貴重か、どのように守るかが検討されねばなりません。

現在、貴重な生物はレッドデータブックなどに掲載されたものを対象としています。これは、現在生息状況などがわかっているものを対象としています。それは、どうしてもきれいな花を持った植物や目立った動物が対象となります。細かな昆虫や見つけにくい動物などは分布の状況すらわからないも多いでしょう。まして、種の同定すらはっきりしないものも多々あります。従って、貴重とされる生物とは、あくまでも現在の知見のみによるもので、その場所の貴重な生物全てを考慮するものではありません。将来のことまで考慮するのは無理との考えもあるでしょうが、種が減ぶという点では変わらないのです。（対応策の一つには、種を守るのではなく場所を守ることが考えられます。）

また、ある種を保護するためには、その場所だけでなく、その種の生息地全般を考慮する必要があります。守られるのは、その対象種自体であるはずですから、分布地域全体を把握して、保護対策を考える必要があると思

われます。開発で若干でも影響がある場合は分布地全体の保護対策を同時に考える位でないと十分な保護は無理でしょう。しかも、その生物の生存のためには、人が手を貸す必要のあるものもあります。その扱いにも考慮する必要がでてきます。

すべての開発でそうした方法を取るのは無理かもしれませんが、自然との共生を目的とする万博では、今後の保護対策のあり方まで示す必要があるのではないのでしょうか。

〔身近な自然の保護〕

今回の予定地の特徴は、かつてそこが地元の生活と結び付いていた自然であり、一時は禿げ山のような場所でもあったことです。

人が多く関与した土地ではあっても、今後人が適当に使ってよいとは言えないでしょう。最近、里山の価値が見直されたように、人が関わってきた自然にも独特の生物相があります。原生な自然とは別の意味で、存在価値のある自然です。

一般的には、里山の生物は多様性の中にも人との係わりで生きてきた適応性があるような気がします。貴重な生物は別として、里山の自然には、今後もある程度の人の関与は受け入れられるでしょうから、上手に利用していくこともできます。子どもの教育上でもこうした自然で遊ばせるのは非常に大切なこととされています。

しかし、こうした自然でも生物の生活の場所として、国土保全上の価値として大切なものです。そのため、おおまかに言えば、こうした自然は内容よりも、規模と配置に注意する必要があります。身近な自然という言葉があるように、多くの人の身近な場所に雑木林として残し、所々にまとまった自然として残すことが考えられます。

自然との共生をうたうならば、こうした身近な自然の保全のあり方にも検討を加える必要があるのではないのでしょうか。

哺乳類の話 (NO.1)

山田一孝(名古屋支部)

〔エゾシカとニホンカモシカ〕

この冬、北海道でエゾシカを間引いて適正頭数にする試みが始まりました。エゾシカは、近年その生息数が増加し、農作物被害に加えて森林の植生にまで被害が広がったためにその管理対策が急がれていたもので、科学的な野生動物保護管理が大規模に実施される例としては日本最初と思われます。

私はこのニュースを聞いて、今から20年余りも前、学生だった自分に初めて、“自然保護”という言葉を意識させ、この世界に足を踏み入れさせるきっかけとなったニホンカモシカの食害問題を思い出しました。

当時、特別天然記念物ニホンカモシカがヒノキの苗木を食害して、林業に深刻な経済被害を及ぼすため、駆除を望む声が強まっていました。その駆除の声に対しては、野生動物をあるいは生き物を殺すのはやめろという声が保護運動という形で起こって、被害者側と保護運動団体がほとんど感情的に対立するという図式になっていました。

私も当時は保護側の一人として被害地の山に入りました。駆除を主張する山村の林業家は「カモシカが増えたから奥山から造林地にエサを求めて出てくるようになった。以前はいなかった場所で最近やたらに目につくんだから確かだ。」、一方保護を主張する市民団体は「一時は絶滅寸前だったカモシカがそんなに簡単に増えるはずがない。山地の開発や人工林化で住む処やエサを奪われたのが問題の原因に違いない。」とそれぞれの言い分は対立したままでした。しかし、実はこの問題が平行線をたどるのは至極当然のことだったのです。すなわちこの時点では誰ひとりニホンカモシカが実際のところ日本に何頭生息し

ているのか、過去どのように増加・減少したのか、どんな所に住み、何をどれだけ食べて暮らしているのか。何年生き、その



間に何頭の子供を産むのかなど、その生態について情報を提供できる人はおらず、想像をぶつけ合うだけの“議論”は議論の形を成していませんでした。それほど日本の野生動物に関する情報は少なかったのです。そして、このときニホンカモシカの生息状況が緊急調査されて初めて多くの事が明らかになり、このニホンカモシカへの対応の経験が、野生動物の保護管理という考えの貴重な材料となっていったのです。

それから、20数年を経て、今回のエゾカモシカでは生息頭数とその変化、分布などの情報が公開されていて管理計画に反映されようとしています。まだ充分とは言えないまでも人と野生動物のよい関係を作る模索がされており、それに取り組む人の努力があることを見守りたいと思います。「試行錯誤の連続となると思う」といった現場の人の言葉を重く受け止めねばならないでしょう。

〔野生動物の魅力〕

さて、このように野生のけもの、哺乳動物という存在はしばしば人間の活動と衝突します。その理由として「人間も哺乳類であり大型動物である。従って同じく哺乳類であり大型動物である多くの野生動物との間の種間の生存競争が起こるのは当然である。」とは言

えないでしょうか。すなわち、ヒトとけもの達とは、その住む環境が重なり合うとても近い存在なのです。そして私は、この“近さ＝親近感”がヒトとけものとの関係に感情や情緒を交えさせるものになると思っています。すなわち、先の農林業被害の問題ならば被害者側にしばしば野生動物に対する過度の憎しみの感情が生まれ、一方、保護を求める側に過度の「かわいそう」感覚をいだかせて、冷静な対応をじゃまする結果となります。

そして観察者が、この親近感を実感するのはめったに会うことのない彼ら野生動物に幸運にも自然のなかで出会った瞬間です。相手と目と目が合い、その瞳に感情や知性と言ったものを感じてドキドキさせられる時、これこそ野生動物観察に魅入られる原動力であろうかと感じるのです。野生動物達を観察する魅力のひとつがこの親近感にあることは確かでしょう。どんな生き物に魅力を感じるかはまったく個人の好みの問題ですが、私は先に述べたような出会いから野生動物への目を開かれ、その後何度かドキドキする体験に恵まれて、すっかりけもの達の世界に魅せられてしまいました。こうして彼等とのつきあいというなんとも骨の折れる世界に、血道をあげることになってしまったのです。“骨が折れる”と言ったのは、観察の困難さという意味もありますが、もうひとつ、気が重いということもあります。好きで観察をしていて気が重いとは？ 実は先にも述べましたが、野生動物と人間活動との摩擦は最近ますます増え、それ以上に生息地の破壊を始めとする彼等の生存権への圧迫は強まっています。のんきに観察だけしていれば楽しいところを、彼等と深く関わるほど保護の道は？ 共存の道は？ という問題に向き合わざるを得ず、おせっかいにも彼等の未来について考え込んでしまいます。もっともこれは野生動物だけではなく、あらゆる自然についてそれを友とする人々が感じていることでしょうけど。

先の二ホンカモシカの問題では、当初“保護派”だった私ですが、被害地を訪れて林業家と話し合う機械を得て、山村や林業の置かれた状況を知るにつれて、保護を声高に主張する正論だけでは、どうにも解決がつかないのではないかと感じるようになりました。解答を求めて林業を手伝い、山村の現状を肌で感じ、野生動物と折り合いを着ける方法はないものかを考えるようになったのです。野生動物というひとつの対象と深く関わることで、かえって興味はそれを取り巻く周囲の様々なものに拡大します。

〔自然観察の対象としての野生動物〕

前置きばかりが長くなりすぎました。野生動物を題材とした自然観察については、これから順に述べさせていただくことにして、今回は冬の山で見られる雪の上の足跡をいくつかご覧にいれましょう。

野生動物観察の最大の特徴にして、もっとも異色な点、「実物の姿を見ないで観察会が成り立つ。いったい代わりに何を見せるのか？」という話は次回からです。



〔上はノウサギの足跡、下はキツネの足跡〕

環境庁平成8年「身近な生き物調査」

ひ っ つ き 虫 調 査 結 果

事務局

当協議会も協力をしました環境庁の身近な生き物調査「ひっつき虫調査」（付着動物散布の種子をもった植物）の結果報告書がきましたので、その概要を次にまとめてみます。

なお、この報告書は各支部にも1部配布しましたが、数冊予備がありますので、希望者にはお送りします。また、愛知県分の結果は、機関誌62号にも掲載しています。

★ 種ごとの傾向

オナモミ

全国的に分布していますが、今回の調査では東北・関東・九州から9メッシュの報告だけでした。極めて少ない種になりつつあることがうかがえます。

オオオナモミ

1929年に岡山で発見されたのが最初のことですが、今回の調査では北海道を除き、東北から九州にかけて全国的に分布がみられ、特に大都市周辺に多いようです。オナモミの仲間では最も普通に見られる種となっています。生育環境は、草地・裸地だけでなく、水辺（特に川原）が多いようです。

イガオナモミ

1945年以降に本州と九州北部に帰化したと推測されている種です。今回の調査では青森から鹿児島にかけて点々と分布が見られ、特に大都市と海岸部に多く見られます。生育環境は、草地と裸地で60%を占め、中でも造成地に多いようです。

タウコギ

ほぼ全国から報告があり、特に関東から多く出ています。しかし、その数は少なく、アメリカセンダングサとの競合や除草剤の影響によるものと推測されています。生育環境は、水辺が68%を占め、特に水田周辺に多いようです。

アメリカセンダングサ

本州から九州にかけて広く分布しています。今回の調査で、北海道にも分布域が広がっていることがわかりました。どんな環境でも見られますが、比較的水辺に多く、川原より水田周辺に多いようです。

センダングサ

福島県・新潟県以南に分布しています。日本にはかなり昔に帰化したと推測されていますが、生息数はそんなに多くないようです。

〔出現個数およびメッシュ〕

種 名	愛知	全 国		種 名	愛知	全 国	
	個数	個数	メッシュ数		個数	個数	メッシュ数
オナモミ	0	14	9	ヒカゲイノコズチ	75	1,521	645
オオオナモミ	223	3,084	754	ヤナギイノコズチ	0	3	3
イガオナモミ	13	287	131	キンミズヒキ	57	1,608	729
タウコギ	4	211	125	ヒメキンミズヒキ	7	147	260
アメリカセンダングサ	102	3,846	1,086	チョウセンキンミズヒキ	0	4	4
センダングサ	8	364	208	ノブキ	3	290	187
コセンダングサ	517	6,042	833	ウマノミツバ	0	211	146
コバノセンダングサ	4	38	35	ミズヒキ	46	1,677	614
ヒナタイノコズチ	257	5,175	1,031	ハエドクソウ	0	212	127

* 調査総メッシュ数は1,598。(10×10km)

コセンダングサ

戦前から知られている帰化植物です。今回の調査では、主に東北部以西に分布し、太平洋側に多く、日本海側にはほとんど見られないという、興味深い傾向が出ました。分布地では、密度も高く自生しています。生育環境は、裸地のうち路傍に多いようです。

コバノセンダングサ

宮城県から長崎県にかけて報告がありました。その数は少ないものでした。ヨーロッパ・アメリカ等広い範囲に分布している種ですが、日本では点在しているだけです。

ヒナタイノコズチ

北海道から九州まで分布し、今回調査された1,598メッシュのうち65%で見られたという最も広く、密度も高い種でした。生育環境は、森林・草地・裸地・水辺それぞれ同じような比率でした。

ヒカゲイノコズチ

青森県から鹿児島県までの報告があり、ヒナタイノコズチとほぼ同様な地域で分布しています。生育環境は、森林が半分位以上でした。

ヤナギイノコズチ

福井県・岐阜県・鹿児島県から1メッシュずつ報告されただけでした。局地的に分布しているのか、他のイノコズチにまぎれて見過ごされたのかはわかりません。

キンミズヒキ

北海道から九州まで、照葉樹林から夏緑樹林まで広く分布しています。今回の調査でも各地から見つかっています。生育環境は、森林が半

分以上でした。

ヒメキンミズヒキ

北海道から九州まで、全国的に分布しています。キンミズヒキより生育環境が限られ、3分の1程度しか報告されませんでした。生育環境は、80%が森林ですが、人工林には少ないようです。

チョウセンキンミズヒキ

約50年前に東京都で発見され、ほぼ全国的に分布しているとされていますが、今回は青森・神奈川・広島から報告があっただけでした。いずれも、従来未記録の新産地です。

ノブキ

ほぼ全国的に分布している種で、日陰の湿った場所などに生育する種です。今回もほぼ全国的に見られています。生育環境は、約80%が森林でした。

ウマノミツバ

ほぼ全国的に分布している種で、木陰に生える多年草です。今回も数は多くないがほぼ全国的に見られています。

ミスヒキ

北海道から九州までの各地で見られ、身近な植物の一つです。生育環境は、半分以上が森林のようです。

ハエドクソウ

ほぼ全国的に分布している種で、木陰や藪に生える植物です。今回も北海道から九州まで点々と報告されています。生育環境は、80%が森林に生育しているようです。

〔環境別の生育状況〕

種 名	森 林	草 地	裸 地	水 辺	種 名	森 林	草 地	裸 地	水 辺
オオオナモミ	16	27	18	39	ヒカゲイノコズチ	54	20	11	15
イガオナモミ	17	37	23	23	キンミズヒキ	57	22	9	12
タウコギ	13	16	3	68	ヒメキンミズヒキ	80	10	3	7
アメノカセンダングサ	24	25	17	34	ノブキ	79	8	6	7
センダングサ	30	35	19	16	ウマノミツバ	81	7	5	7
コセンダングサ	17	31	24	28	ミスヒキ	56	21	12	11
ヒナタイノコズチ	24	31	19	26	ハエドクソウ	81	9	3	7

* 数字は、構成比で%。

事務局から

〔行事結果〕

★指導員のつどい

〔期日〕平成10年12月13日(日)

〔場所〕名古屋市教育館 (出席7名)

〔内容〕

●観察会の工夫あれこれコーナー

指導上の工夫についての意見交換の予定でしたが、観察会全般の意見がでました。

〔主な意見等〕

- ・チョウの羽をラミネートにはさんで示す。
(アイロンでもできる)
- ・子どもに温度計を渡すと、いろいろなもの計ってみる。
- ・木の葉の散り方も樹種によって、バラバラ散るもの、一度に散るものなどがふる。
- ・定例観察会では、自分たちで勝手にやるだけでなく、実施結果を配ったり、子ども会や学校に参加を呼びかけたり、地元との結び付きを考える必要がある。それが開発計画が生じたときなど役に立つ。
- ・指導員の社会的役割を意識したい。自分たちだけのものとしてはいけない。
- ・高校生などを補助者として利用できないか。受付などいろいろな役割があり、多くの人に参加してもらうことも意味がある。
- ・協議会の欠点は、他の団体との強調がないことである。
- ・自分にとって観察会とは何かという質問には、「自然の中からものを見る目を養いたい」「自然との接し方、これは人生も同じ」「文化として」など。
- 自然に関するホームページの状況
大谷さんから、現在どんなホームページがあるかとの発表がなされた。
- 情報交換「おしゃべりコーナー」
各種資料の閲覧と参加者同士の情報交換のタイム(休憩を兼ねて)

●懇親会

別の場所で、夕食を兼ねて4人でのんびりしました。

★その他

予定していた、研究会「里山の管理」と視察研修会「琵琶湖博物館等の見学」は参加者が少なく中止しました。視察研修は、11年に再度実施しますので、ご参加ください。

〔組織検討委員会〕

現在、組織検討委員会を設けて、今後の協議会のあり方について検討を行っています。

既に、3回の検討会を行いました。委員の皆さんが協議会の経緯や現在の組織・事業を覚えるのが中心で、今後のあり方についての議論まで進んでいません。協議会が如何にわかりにくい存在であったか、事務局としても反省しているところです。

この機関誌を送る際に葉書を同封しますので、会員の皆さんの協議会に対する不満や要望、今後のあり方についてのご意見などお聞かせください。検討委員会で検討する参考にしたいと思います。

会 員 異 動

【脱退】

- ・稲葉美代子(東三河支部)
- ・白井貞明(東三河支部)
- ・西尾弓子(西三河支部)
- ・日高牧人(知多支部)

【住所変更】

- ・山田果与乃(尾張・名古屋支部)
383-0005 春日井市押沢台 5-6-29

〔第5回自然観察指導員全国大会の概要〕

自然観察指導員制度ができて20周年を記念して、全国大会がこの1月16～17日に東京都渋谷区のこどもの城で開かれました。愛知県から事務局の佐藤と朱雀さんが16日のみ出席しましたので概要をお知らせします。（朱雀さんの感想は次号に掲載の予定です。）

(1) 講演「自然観察指導員の原点をもう一度」

この制度の創設者でもあるNACS-Jの柴田敏隆さんと金田平さんから、指導員設立の経緯や考え方についてお話がありました。

- ・採集問題では、当時の子供は自然体験はあっても倫理感がなかったこと、自然物は公共物であることを基本としたかったこと、採る面白さで全体を見ることを忘れるのを恐れたことなどが理由である。
- ・講習会を行政と共催したのは、行政に考え方を伝えたかったことと、指導員を活用して欲しかったため。
- ・観察の技術や自然の知識は評価できるが、自然についての哲学は評価できないため、上級指導員制度は作らなかった。
- ・保護運動を無理強いすることにより、人を減らすことを恐れている。その人の生活に係わる事柄の場合もある。普及活動はできれば敵を作りたくない。

(2) 報告「自然観察指導員についての

NACS-Jの基本的考え」

事務局長の村杉さんから次のような報告がありました。

〔指導員のあり方・役割〕

- ①指導員は、地域の自然保護教育の担い手である。
- ②指導員は、地域の自然や文化に根ざしたものの見方、考え方の確立を常に目指すこと。
- ③指導員は、人と自然の関係、および人間同士の関係において、生物の多様性の保護と持続的社会的実現のために適切な対処と行動が取れるように努力すること。

- ④指導員は、自然保護の実線者としての専門性、自然観察者としての専門性、指導者としての専門性を研鑽し続けること。

〔指導員連絡会について〕

- ①連絡会は、上記の指導員が主体となって、自主的に構成され、運営される地域の連絡組織である。

- ②連絡会は、主体である個々の指導員の活動を促進し、発展させる。

（私の印象では、この指導員のあり方には厳しく考えると非常に困難なことが書いてありますが、要は指導員の行う観察会は自然保護につながる内容を目指し、それを数多く広げていくようにしたい、ということのように思われました。

しかし、疑問に思ったことは、指導員のあり方にある①～④にあることを指導員個々の努力だけに期待するのは無理ではないかということです。そのための研修や自然保護のあり方の検討の場や指針の提供が必要であり、それは基本的にはNACS-Jの役割になるのではないのでしょうか。地域の連絡会もその一部を担うことは考えられますが、連絡会だけでは荷が重い仕事です。3日間の講習会と「誰でもどこでも自然観察会」の掛け声だけでは、優れた指導員は育たないように思えます。）

(3) パネルディスカッション

「ここまでの道とこれからの道」

(4) 分散会「指導員のあり方を考える」

この2つについては、内容が多くてあまりメモが採れなかったのでご紹介できませんが、3月の総会では、当日のアンケートの要約を含めて資料提供したいと思っています。



観覧会は、長袖、帽子、サングラスで・・・？

編集 部

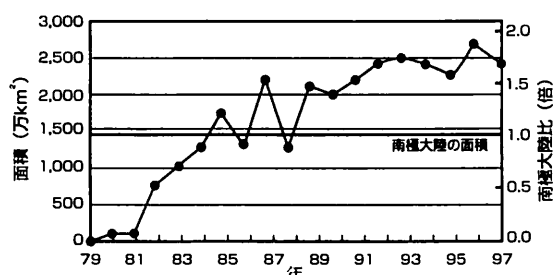
観覧会にどんな服装で出かけていますか？

表題にあるように、長袖、帽子は普通のように思われますが、サングラスは？さらには、日焼け止めクリームを塗ってとなるとどうでしょうか。一々そんな面倒なことはやってられないし、気にもしてないという方が多いのではないのでしょうか。ところが、国によっては重大な問題として対処している所もあるのです。

ここまで書けば、オゾン層の問題だなと思われる方もあろうかと思えます。オゾン層破壊の問題は日本はそれ程関係ないと思われる方もいるかもしれませんが、そうではありません。今回はオゾン層破壊の問題について考えてみたいと思います。

【オゾンホール】

ご存知のように、オゾン層はフロンによって破壊されると言われています。



オゾンホールの面積の経年変化
(気象庁 オゾン層観測報告1997)

大気中に放出されたフロンは、偏西風などによって極に集まります。特に海に囲まれている南極は温度勾配が大きいために集まりやすく、オゾンホールができやすい状況をつくっています。このオゾンホールは春(9～11月)に拡大することが知られており、太陽によって暖められたフロンが活性化し、オゾン層を破壊し始めます。そして、夏になると、紫外線によって

オゾンが作られオゾンホールは小さくなります。この繰り返しによって、年々、オゾンホールは大きくなり、しかも回復に時間がかかるようになっていきます。

また、オゾン量の減少は南半球だけではなく、オゾン層の破壊は、熱帯域を除き、ほぼ全地球的に進行しており、特に高緯度地域でオゾンの減少率が高くなっています。日本では、気象庁が札幌、つくば、鹿児島、那覇、南鳥島の5地点で観測を行っていますが、札幌上空ではオゾンの減少傾向が確認されています。

【オゾン層破壊による影響】

では、どんな被害が生じるのでしょうか。自然観察と関係があるのでしょうか。実は服装など気をつけてということだけではないのです。

オゾン層破壊に伴い、有害な紫外線(UV-B)が地上に降り注ぎ、その結果皮膚がんの危険性がある、あるいは白内障が増えるということはよく知られていると思います。それらは人間についての直接的な被害ですが、防衛術を知らない自然界の動植物のほうが被害は甚大のようです。

ー動物への影響ー

紫外線に殺菌作用があることはご存知でしょう。晴れた日に布団や洗濯物を干すのは、乾燥と殺菌を考えてのことです。この殺菌作用は、人間など大きな動物につく菌を殺してくれるという意味では有効な作用です。しかし、紫外線が強くなると海の生物に必要な小さなプランクトンも殺してしまいます。

小さなプランクトンが少なくなると、それを餌にしている大きなプランクトンや貝、小魚などは餌がなくなって数が減ってしまうでしょう。

すると、それを餌にしている大きな魚や鳥も餌がなくなって数が減ってしまいます。

魚が減れば人間はどうなるのでしょうか？

もっと身近なところではどうでしょうか？

アメリカのオレゴン州では、カエルが数減っているそうです。これは、直射日光のあたる浅い水底に生み付けられた卵が孵化しないようです。

(木の陰か深い水底に生み付けられるアマガエルは減っていない。)

カエルの卵は観察会でも見ることができます。日当たりのいい場所に卵を見つけたら、オゾン層と紫外線の話もできるでしょう。

—植物への影響—

植物は紫外線の強かった大昔から地球上にあったため、動物と比べて紫外線には強いと言われていますが、それでも影響を受けます。

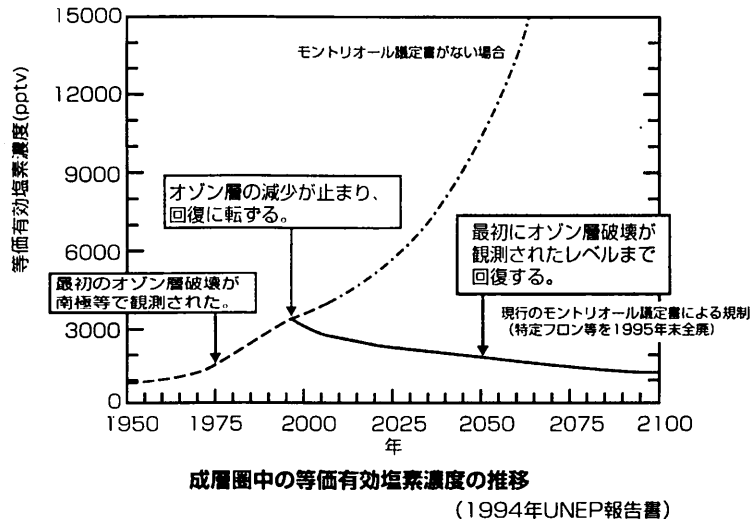
植物は日光を受けとってエネルギーにしていますが、利用している光の波長が短くなると、光合成の効率がおちて成長が悪くなります。また、有害な紫外線のあたる量がずっと増えると、細胞のいたみがひどくなり、植物の葉は、黄ばみ、そして落葉し、ひどい場合は枯れてしまいます。

農作物のうち70%の作物が影響を受けるだろうと考えられています。なかでも大豆は影響を受けやすい作物で、有害な紫外線が25%増えると、ある種の大豆の生産は25%も低下するのではないかと推定されています。

【オゾン層の今後の予測】

国連環境計画（UNEP）の1994年の報告では、1992年の改正モントリオール議定書をすべての締約国が遵守した場合には来世紀初頭から

オゾン層は回復に転じ、南極のオゾンホールも、2045年頃に出現なくなると予測されています。ただし、最近の知見によれば、温室効果ガスの増加が、オゾン層の回復を遅らせることになる指摘されています。



また、一方では、今オゾン層を破壊しているフロンは、今までに生産されたフロンのたった10%で、残りの80%のフロンは、成層圏のオゾン層をめがけて上昇中（大気中に放出されたフロンが成層圏に到達し、オゾン層を破壊するまで15年程かかると言われている。）であり、残りの10%は、私たちの身の回りに冷蔵庫やエアコンの冷媒として使われているとの指摘もあります。つまり、本格的な被害はこれからということです。

【対策】

現在、特定フロンは製造中止になっています。しかし、今使っている多くの冷蔵庫やエアコンなどにはフロンが入っており、これらの機器の廃棄の際には、ほとんど処理されることなく大気中に放出されているのが現状です（このことについて罰則規定はありません）。このため、特定フロンを回収、処理するためのシステムが必要です。

我家でエアコンを買って替えた時、電気屋さん

はどうするかと思って見ていたら、あつという間にパイプを切断し、フロンを放出してしまいました。さて、ご家庭で冷蔵庫やエアコンの買い替え時などに、これまで使っていた機器に残されたフロンはどう処理されるでしょうか…？

フロンは本来自然界にはなく、人間が発明し、人体にも安全と言われていた物質です。

ところがオゾン層を破壊するという思いもしなかった影響を及ぼすことが明らかにされました。

私たちの身の回りには、人体には安全と言われている化学物質がたくさんあります。それらの物質は果たして本当に人間や、他の生物、地球にも安全なのでしょう…？

最近、環境ホルモンのことがいろいろ言われています。まだまだわからないことが多いようですが、環境ホルモンなど環境問題について関

心を持つことはできます。日頃から環境問題にもっと関心を持って、積極的に情報を取り入れていくように努めていきたいものだと思います。

フロンについて

現在、特定フロン（フロンの中でもオゾン層を破壊する力が特に強いもの）については生産されていません。このため代替フロンが開発されてきていますが、代替フロンの中にも、特定フロン程ではないにしろ、オゾン層を破壊するものもあり、順次規制が進みつつある状況です。また、フロンはオゾン層を破壊するだけでなく、温室効果を持っています。オゾン層を破壊しないという代替フロンにHFC（ハイドロフルオロカーボン）がありますが、このHFCも二酸化炭素に比べても大きな温室効果があります。

山びこ広場

★フォローアップ研修は楽しい

11月3日のFU研修で、段戸裏山へ行きました。当日は奥三河支部の指導で行われました。段戸山の名前は地形からつけられたとのこと。真っ赤に紅葉していたヒナウチワカエデの見分け方など、地元方なればその話が盛り沢山。普段お会いできない方たちとの交流もでき楽しく充実した一日でした。新しい指導員のみなさん、もっと気軽にどんどんFU研修に出席されることをお勧めします。

★「三河の植分」

B5版、215頁、写真カラー4色

上記の本を11月3日FU研修の指導者熊谷尚久氏が出版されました。推薦文を愛教大の熊谷平氏が書いておられます。内容は同氏のライ

フワークの集大成といえるもので、自然観察指導員として長年観察された結果を、丁寧にわかりやすい文章でまとめられています。一度拝読されることをお勧めします。

〈青木雅夫（名古屋支部）〉

★教えてください

東三河支部の石黒さんから、森林による二酸化炭素の吸収能力（測定する方法）についてのお尋ねがありました。〈事務局〉

※ このコーナーは会員の皆さんと情報交換の場所です。会員に呼びかけたいこと、催し物紹介等何にでもお使いください。自然関係意外でも結構です。

—自然観察会事実施結果—

10/ 4 (日) 指導員派遣

知多市地域センター依頼の「水路や田圃の生き物」観察会に協力しました。参加者は、20名位。センター東の田圃は、稲刈り後で水もなかったが、溝でザリガニを見つけました。ミジンコも見られました。用水路では、サカナ・ザリガニ・ヤゴ・マツモムシ等を見つけるのに子どもたちは大活躍でした。馬池では、ツバメ・コサギ・ギンヤンマ・ヒシを観察しました。モズの高鳴きを聞きながら、尾の振り方、色、くちばしを見て、生態の話を行いました。

・マルカメムシ・ケラ・シジミチョウ・アキアカネ・シオカラトンボ・ギンヤンマ・アメリカザリガニ・アメンボ・マツモムシ・ゲンゴロウ・ユスリカ・サホコカゲロウ・トビケラ・ヤゴ・ミズムシ・ブルーギル・タニシ・ツバメ・コサギ・モズ・ムクドリ・カラス

〔相羽、加藤、芝山、高橋、中井(康)、降幡〕

10/10 (土) みどりの少年団

知多地区みどりの少年団交歓会を、大府市みどり公園で実施しました。県事務所の課長さんも参加しました。隊員と付き添いで 159名を三班にして、それぞれに指導者をつけました。午前中は「自然観察」「ネーチャーゲーム」を行い、午後は「木の実、木の葉」を使ったクラフトでした。

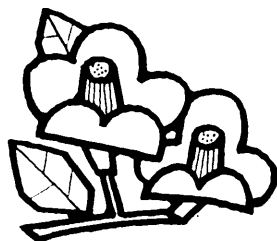
ドングリを使って、笛・こま・弥次郎兵衛を作りましたが、穴あけセットの道具を利用したためか怪我をした隊員はいませんでした。厚紙に木の葉や木の実を接着させるのに便利な道具もありました。クラフト作りは子どもたちが熱中して、時間を延長するほどでした。午後2時に解散して、それぞれ家路に着きました。日陰が少ない公園でしたので、バテた子もいました。

〔石原、板倉、岩崎、大橋、加藤、竹村、内藤中井(康)、原、降幡、皆川、村井、村瀬、吉村〕

11/ 1 (日)

知多地区

「自然の材料を集めてクラフト作り」を知多市大草公園で実施しました。参加者は15名。薄曇りの天気で肌

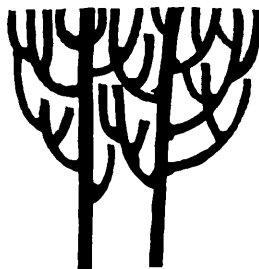


寒い日でした。城の裏に青いビニールシートを広げ、材料集めにかかる。つる植物・どんぐり・枝等を集めました。どんぐりで、こま・弥次郎兵衛・クラッカー・寄せ絵を作りました。つたでは、籠をつくり、花を添えて花籠にもしました。枝を輪切りにして、ヒートボンドでいろいろなものを接着し、作品にしました。シイの実をフライパンで炒って食べたのも楽しそうでした。

11/ 3 (休) 半田地区

半田市新美南吉記念館で、「南吉の森と童話の世界」をテーマにして実施しました。参加者は、20名位。たもを持った人や、名古屋から来た人もありました。キチョウを追う子ども、ズボンに着く草の実、逃げるキジバト、モズの高鳴き、カクレミノの姿、セセラギ、里山に田圃、保全したい森、熟れた柿、たわわに実ったみかん、晴れた青空など、みんなで楽しい一日を過ごしました。

〔大橋、加藤、高橋、榊原(靖)、原、藤井、降幡、皆川、村瀬山田(絹)〕



行 事 案 内

☆ 協議会総会

- ・ 期日：平成11年3月28日（日） 午後1時30分から
- ・ 場所：愛知県産業貿易館 （地下鉄「市役所」駅下車 徒歩8分）
- ・ 内容：総会・講演会「アマゾンの自然」大竹 勝・他



★問合せ先：佐藤（☎05617-3-5674）まで

✂ 編集後記 ✂

埋立か保全か、連日、藤前干潟についての議論が新聞紙上でも取り上げられています。

藤前干潟は庄内川・新川と日光川の河口部に位置していますが、先日の新聞にはちょっと気になる記事も載っていました。ある環境ホルモンが全国的にも高濃度で日光川で検出されたということです。鳥たちのエサになる底生動物は川から運ばれる豊かな栄養分をもとに生息していますが、川が運ぶものは栄養分だけではないようにも思えます。PCBなどが南極周辺にも汚染しているという記事も目につきます。鳥たちのことを思えば、藤前干潟の存亡とは別に、やるせない思いがします。

この機関紙が皆様のお手元に届くのは、新年の1月中頃でしょうか。その頃には、藤前干潟も新しい局面を迎えているでしょうか。新しい年は、昨年よりよい年にしたいと思います。

機関紙作りは皆様の投稿が頼りです。皆様の原稿をお待ちしています。（近藤）

＝ 目 次 ＝

自然との共生について	1
(話題の地見学会結果)	
哺乳類の話①	5
ひっつき虫調査結果(環境庁)	7
事務局から	9
観察会は、長袖、帽子、サングラスで...?	11
山びこ広場	13
支部だより	14
知多支部	

